

日付:2016年2月7日／聖書:ヨハネによる福音書11:17~44

説教:「わたしは復活であり、命である」

—「2・11信教の自由を守る日」を覚えて—

《ラザロは墓に葬られてすでに四日もたっていた》(17節)とある。それは、人の完全な死を現している。イエスは、そういう完全な死を前にして《あなたの兄弟は復活する》と宣言する。それは何を意味するのか。マルタはこう答える。《終わりの日の復活の時に復活することは存じております》(24節)。しかしイエスは、マルタの復活信仰の告白に対して、今ここでの事として語る。《わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる》と。今、目の前に立っているイエスこそが死で終わらない方であり、この方を信じるならば、たとえ死んでも生きるという。復活とは、死なないことではなく、たとえ死んでも、そこで新しくイエスと共に生きるということにある。

私たちは、このメッセージをもう一つ越えて行く必要があるのかと思う。それは、教会自体が、死と復活を現して行く役割があるということ。絶望に向き合うということ。今週は「信教の自由を守る日」を迎える。私たちキリスト者は、「建国記念の日」に対して、「信教の自由を守る日」として異を唱えた。それは再び、国家権力による宗教への弾圧が成されないこと、「思想・良心の自由」が奪われないこと、そして二度と子どもたちを戦場に送らせないという思いが込められている。近年、にわかに戦争の足音が聞こえ出していると感じるのは、私だけではないであろう。「特定秘密保護法」、「集団的自衛権」、「安保法制関連法案」、「マイナンバー制度」・・・、そして「辺野古新基地建設」。平和を願うがために声を上げ、座り込みを続ける人々を、まるでブルドーザーで押しつぶしていくかのように排除し、暴力を公然と実施する政府の在り方に、危機感を覚え、絶望さえ思わせる状況が、暗闇が私たちを覆いつくしている。

教会は、この絶望かのように思われる、死の状況に向き合っているかと問われる。キリストは「憤り」をもってこの絶望に向き合い、決して「終わりの日の復活の時に復活すること」としてではなく、今ここでの事としてイエスは語る。《わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる》と。教会は、この世の死に、絶望に向き合っているか。復活の希望を信じているか、と問われている。(神谷)